

うなものばかりであった。

岡田 (1935) も述べているように、オニバスは狭適応性の種であるが、その生育地は山地ではなく、平地の水域であることからもうかがわれるように、けって清澄な水を好む植物ではない。ある程度富栄養化した池沼で旺盛に繁茂する種であるといつてよい。しかし、ここに見たように、富栄養化が極端に進みアオコが発生するにいたつては、オニバスの生育も著しく困難になると言えそうである。

この度の例は、オニバスの発芽が阻害されたのではなく、一旦、水面にまで達していた個体が被害を受けたという事実にも注目しておきたい。もっとも、発芽～幼葉期にはアオコは発生していなかつたわけであるから、この发育段階へのアオコの影響はわからない。

なお、この池にオニバスの生育することは浜島繁隆氏の調査資料によって知ることができた。記してお礼申し上げる。

文献

Okada, Y. 1928 Study of *Euryale ferox* Salisb. I. Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ., Ser. IV 3: 271 - 278.

岡田要之助 1935 本邦に於けるオニバス分布に就て. 生態学研究 1: 156 - 158.

○ シュナイダー博士の来日

米国サウスウエスト・テキサス州立大学助教授 Edward Schneider 博士がオニバス研究のため来日されました。世界中のスイレン科 (広義) を研究中で、東洋にしかないオニバスを自生地で調査するため日本を訪れられたものです。オニバス群落が次々と消滅している現実を目のあたりにして、ずいぶん悲しんでおられましたが、7月17日から8月10日まで、京都および神戸に滞在され、精力的に野外調査を続けられました。近い将来、その成果が形になるものと思われまふ。(角野)

~~~~~  
(4 pよりつづく)

参考文献

植木邦和 1981 水生雑草ホテイアオイの諸特性 植物と自然 15巻9号 p. 33-37

河口宏太郎 1975 新食糧資源“ウォルヒア” 化学と工業 28巻10号 p. 92-95

小出五郎 1979 超石油エネルギー 朝日新聞社発行

小林登史夫・植木邦和 1980 新しいバイオマス原料の育成と利用

— 水生植物ホテイアオイを例として — 化学と生物 18巻4号 p. 231 - 236

小山 実 1980 生物が蓄えるバイオマス資源 科学朝日 40巻1号 p. 55-59

田中 修 1981 ウキクサの開花とサルチル酸 植物と自然 15巻9号 p. 16-20

Bhanthumnavin, K. and McGarry, M.G., 1971. *Wolffia arrhiza* as a possible source of inexpensive protein. Nature (London), 232: 495

Culley, D. D., Jr., 1976. In: Making Aquatic Weeds Useful. National Academy of Sciences, Washington D. C., pp. 149 - 150.

Hillman, W. S. and Culley, D. D., Jr., 1978 The Uses of Duckweed. American Scientist 66: 442 - 451.

Tanaka, O. and A. Takimoto, 1975 Suppression of long-day flowering by nitrogenous compounds in *Lemna perpusilla* 6746. Plant & Cell Physiol. 16: 603 - 610

Truax, r., D. Culley, M. Griffith, W. Johnson, and J. Wood. 1972. Duckweed for chick feed? Louisiana Agriculture 16(1): 8 - 9.

Van Dyke, J. M. and Sutton, D. L., 1977. Digestion of duck weed (*Lemna* spp.) by the grass carp (*Ctenopharyngodon idella*) J. Fish Biol., 11: 273 - 278.